

富山県大門町

# 二口油免遺跡発掘調査報告(4)

—町立統合幼稚園造成に伴う発掘調査—

2005年3月

大門町教育委員会



## 序

大門町は、広大な平野の南方に丘陵地帯を控える、自然に恵まれた町で、大伴家持が詩の中に『三島野』と詠んだことで知られています。

文化遺産である遺跡は数多く存在し、古くからこの町の活気を感じさせてくれますが、住み良さを求める今日の私たちの行為によって、失われようとしていることも事実であります。

私たちの前から姿を消すその前に、それらを後世に残すことが我々の重大な責任であると痛感しております。

本調査は、大門町立統合幼稚園の建設に伴って、消え行こうとする先達の遺産を記録として保存し、また子孫に伝えようと、本誌にその成果を収めました。

本誌が多くの方々目に触れ、活用されて、地域の歴史の理解と文化財保護の高揚の一助になれば幸いに存じます。

調査の終了に際し、適切な助言指導を賜りました諸先生、調査に協力をいただきました地元関係各位には、厚くお礼申し上げます。

平成17年3月

大門町教育委員会

教育長 荒井 茂昭

## 例 言

1. 本書は、富山県射水郡大門町二口地内に所在する二口油免遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大門町立統合幼稚園造成に伴う本調査である。
3. 整理作業は、大門町内遺跡出土整理作業に伴う緊急雇用創出特別基金事業である。
4. 調査期間は、現地作業は2004年11月9日～2005年2月14日（実働48日）である。調査対象面積は2,060㎡である。整理作業は2004年12月28日～2005年3月30日（実働61日）である。
5. 調査は、大門町教育委員会の指導・監理のもと、株式会社中部日本鉱業研究所が実施した。
6. 調査は、株式会社中部日本鉱業研究所考古事業部埋蔵文化財調査室 田中昌樹が担当した。
7. 本書の編集・執筆は尾野寺克実（大門町教育委員会）、田中が担当した。
8. 調査から本書の作成に至るまで、下記の方から御教授、御協力を頂いた。記して感謝の意を表する。  
金三津英剛（敬称略・五十音順）
9. 現地作業及び整理作業の参加者は以下の通りである。現地調査の作業は、社団法人大門町シルバー人材センター、社団法人新湊市シルバー人材センターの御協力を得た。  
安立佳子・石田哲雄・泉 義正・越前時男・大坪市雄・小川 勉・北川泰子・工藤常雄・黒田忠明・真田恭子  
佐野睦美・新谷松男・新保勝正・新保利恵・高橋英更子・寺井信子・寺井 守・新田三喜子・橋 真理子  
畑 シノブ・林 憲彦・広上正美・福田恵子・鈴木藤夫・空田郁夫・空田紀代春・堀田 肇・前田明子・宮口美香  
養口和弘・山田 勇・渡辺賀世子（敬称略・五十音順）
10. 出土品・記録資料は、大門町教育委員会にて保管している。

## 凡 例

1. 方位は全て座標北であり、水平基準線は海拔高で表示した。
2. 本文中に使用した遺構の表記には次の記号を用いた。  
SD：溝      SK：土坑      SP：ピット  
：地山      ：赤彩範囲      →：加工方向（ナデ・ヘラケズリ）
3. 本書で使用している土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（2002年版）に準拠している。
4. 実測図は、原則的に土器を1/4、出土状況図を1/40、遺構断面図を1/40、遺構平面図を1/40で示した。その他縮尺の異なるものがある場合は、その都度縮尺を示した。

# 目次

## 本文

序

例言・凡例

目次

### 第1章 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置……………1
2. 自然環境・周辺の遺跡……………2

### 第2章 調査の概要

1. 調査に至る経緯……………5
2. 調査の経過……………5
3. 基本層序……………5

### 第3章 調査の成果

1. 遺構の概要……………6
  - (1) 検出遺構……………6
  - (2) 土坑……………6
  - (3) 溝……………10
  - (4) ビット……………10
2. 出土遺物……………12

### 第4章 結論……………21

引用・参考文献

## 挿図

- 第1図 調査位置図(1:5,000)……………1
- 第2図 周辺遺跡分布図(1:50,000)……………3
- 第3図 基本層序(1:40)……………5
- 第4図 遺構全体図(1:400)……………7
- 第5図 SK03・11遺構平面図・断面図(1:40)……………9
- 第6図 SK24・27、SD02遺構平面図・断面図(1:40)……………11
- 第7図 SK01出土遺物(1:4)……………13
- 第8図 SK03・11・24、SD02出土遺物(1:4)……………15
- 第9図 包含層出土遺物(1:4)……………17
- 第10図 二口油免遺跡遺構配置図(1:2,500)……………22

## 表

- 第1表 二口油免遺跡周辺と大門町内の遺跡……………4
- 第2表 土器観察表1……………19
- 第3表 土器観察表2……………20

## 写真

- 写真図版1……………24
- 写真図版2……………25
- 写真図版3……………26
- 写真図版4……………27
- 写真図版5……………28
- 写真図版6……………29

# 第1章 遺跡の位置と環境

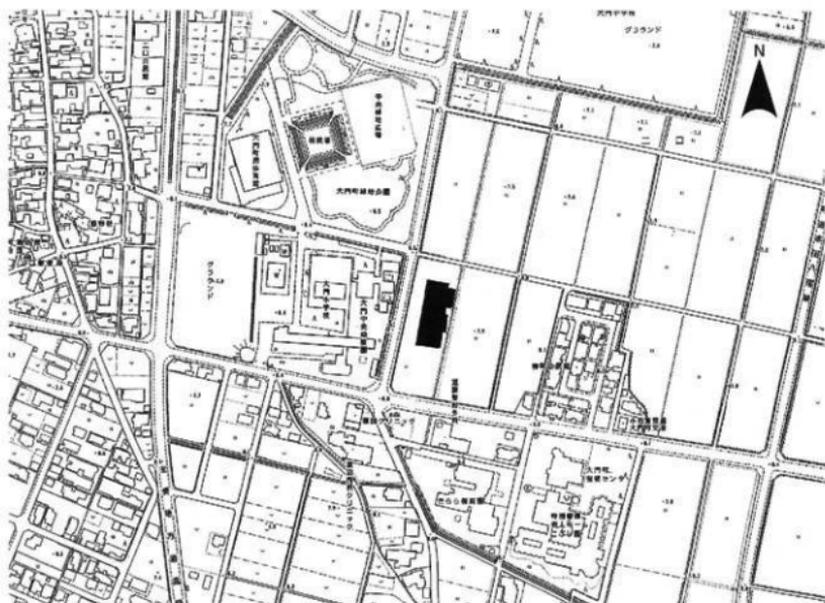
## 1. 遺跡の位置

大門町は、富山県の中央北部、射水平野の南西端に位置する。行政区では、東は小杉町に、西・南は庄川を挟んで高岡市に、北は大島町に接している。地形的には、町の西側を流れる庄川と南北に貫流する和田川・下条川などによって形成された扇状地からなり、南方には標高40～15mの丘陵地が連なる。

今回、発掘調査を行った二口油免遺跡は、庄川右岸の扇状地、二口地内に位置する。周辺には現在、北側に大門中学校、西側に大門中央幼稚園・大門小学校、北西側に相撲場を含む大門町緑地公園、南東側に大門町保健センターなどが所在し、町の教育施設が集中する地域である。今調査地の現況は水田であり、標高約8～7m前後で、南から北に向かって緩やかに傾斜する。

町の歴史に目を向けて見ると、この地は、奈良時代の越中国守大伴家持が歌の中に詠んだ『三島野』の地の中核地に当たるとされている。また、大門町史（大門町教育委員会1981）によると、「昭和10年（1935）当地内から、耕地整理の際に朱塗りの壺や高坏などの破片が発見された。これが大門町で弥生時代の遺物が発見された最初である」とされている。

それから現在に至るまで、二口油免遺跡は3次4地区、約21,000㎡の発掘調査が行われている。それらの調査結果から当遺跡は、南北約400m、東西約300mの範囲に及ぶ弥生時代後期から近世に至る集落遺跡であることが確認されている。



第1図 調査位置図（1：5,000）

## 2. 自然環境・周辺の遺跡

二口油免遺跡の位置する庄川右岸の崖状地は、庄川・和田川・下条川などの諸河川によって運ばれた礫・砂・粘土などの未固結の氾濫原堆積物で形成された沖積低地である。旧石器時代には氷河期であったこの沖積低地は、約6,000年前の縄文時代前期頃には、温暖化に伴って海岸線が射水丘陵の山際まで広がる海進状況が見られた。縄文時代中期以降に気候が再び寒冷化し始め、弥生時代後期頃には現在よりも1kmほど沖合に海岸線が後退していた。その後、6世紀頃から再び温暖な気候になると海面が上昇し、海岸線が海進するようになった。この海岸線の後退と海進に伴い、各地で潟が形成されるようになった。万葉集の中で語られ、また鎌倉時代には、潟の入口辺りが方生津町として海運で栄えていた「方生津潟」はその名残である。再び13世紀頃から気温の低下に伴い海退現象が起こる。この間に射水平野の湿原地帯は、水田開発が進行していくことになった。しかし、この寒冷化が進展すると農耕に影響を及ぼし、また海水温の低下から漁業にも大きな影響を及ぼすようになった。このように、人々の生活は気候の変化によって大きく左右されるものであった。

先人達はこのような気候変動の中で、自らの生活の場を求めて様々な場所に集落を形成していった。そして現在、様々な調査の結果、射水平野や南方に連なる射水丘陵をはじめとする丘陵地は、遺跡の密集地であることが確認されており、中でも縄文時代から近世までの集落遺跡が、主体をなすことが分かってきた。

二口油免遺跡を中心に周辺の遺跡に目を向けると、東側には、弥生時代から近世にかけての「二口五反田遺跡」(2)が隣接する。さらにその東側には、縄文時代後期の集落を主体とし、その後近世まで続く「二口遺跡」(9)が、中世集落を主体とし陸路と水路の便に恵まれた「安吉遺跡」(11)が存在する。南西側には、弥生時代後期の玉造工房を含む集落を主体とし、縄文時代から近世まで続く「本江畑田Ⅰ遺跡」(23)「本江畑田Ⅱ遺跡」(24)が、南側には奈良時代から中世まで続く集落遺跡である「本江大坪Ⅰ遺跡」(20)「本江大坪Ⅱ遺跡」(21)が、南東側には弥生時代終末から古墳時代、そして奈良時代から中世にかけての、2時期の集落の中心地をもつ「榎田遺跡」(19)といった遺跡が存在する。

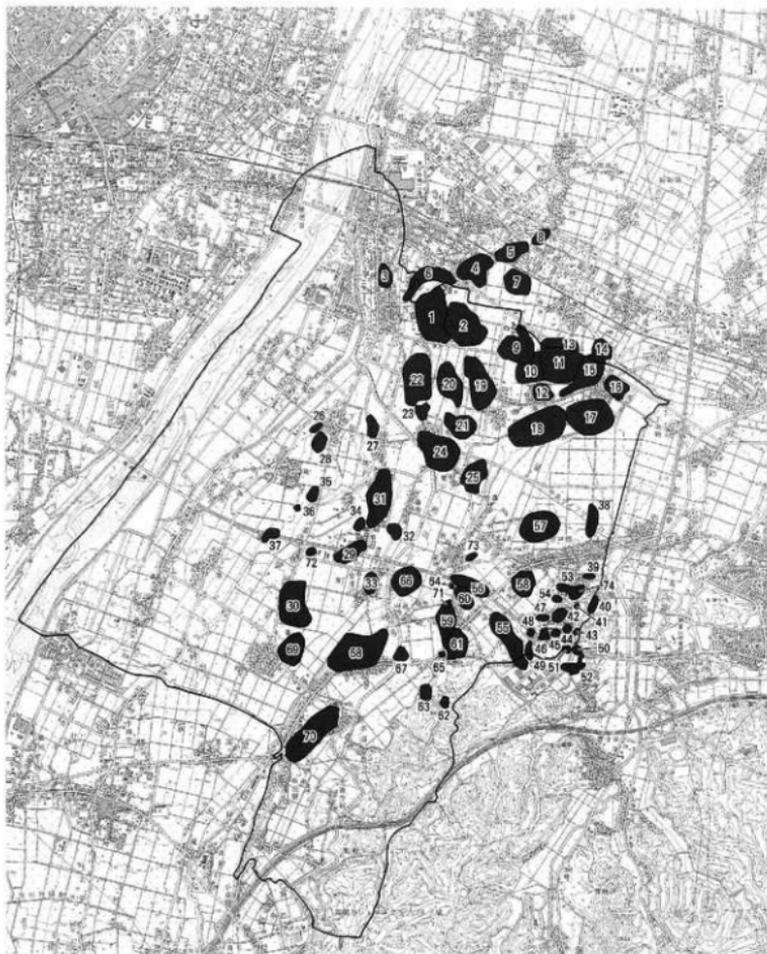
町を東西に二分した場合、遺跡が東側に集中していることが窺える。これは、古来西寄りに流れ、大雨のたびに暴れ川となっていた庄川を、近世になって現在の方に付け替えられたことから、町の西側は洪水による災害が発生しやすく、集落を形成するのは難しかったからだと推測できる。

平野部の遺跡では、町のほぼ中央で現在の大門町企業団地内にある、縄文時代前期から近代にかけての複合遺跡で、弥生時代後期の方形周溝墓が確認されている「布目沢北遺跡」(31)が、北東側には、弥生時代後期の集落を主体とし、近世まで続く「本田畑田遺跡」(17)と、弥生時代中期から古代までの集落である「本田宮田遺跡」(18)などが所在する。

標高40～15mの丘陵上には、直径36.5m、高さ6mの円墳で県指定史跡の「大塚古墳」(71)、すでに消滅してしまっているが「生源寺新十三塚古墳」(64)、縄文時代中期から後期の集落と、奈良時代から中世にかけての「生源寺新遺跡」(61)などが所在する。また、飛鳥から白鳳期の瓦陶兼窯と工人集落である、国指定史跡の「小杉丸山遺跡」(55)を含む「小杉流通業務団地内遺跡群」(40～54)なども所在する。さらに、大沢山と呼ばれる独立丘陵上には、縄文時代中期集落と弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭にかけての集落を主体とし、旧石器時代から近世にかけて存続する国指定史跡の「串田新遺跡」(70)が所在する。

上述した遺跡以外で、二口油免遺跡と同時代、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての遺跡は、「縄田遺跡」(25)、「南郷中学南古墳」(65)などが所在する。

その他にも、弥生時代後期終末から古墳時代前期にかけての遺物散布地は、町内において広範囲で確認されていることから、まだまだ多くの当概期の集落が大門町には存在するものと思われる。



第2図 周辺遺跡及び大門町遺跡地図 (1:50,000)

- 1二口油免遺跡 2二口五反田遺跡 3二口西遺跡 4八塚C遺跡 5八塚A遺跡 6八塚土田遺跡 7八塚B遺跡  
 8小林南遺跡 9二口遺跡 10HS-03遺跡 11安吉遺跡 12安吉Ⅱ遺跡 13赤井西遺跡 14赤井南遺跡 15本田天水遺跡  
 16本田杉田遺跡 17本田畑田遺跡 18本田宮田遺跡 19棚田遺跡 20本江大坪Ⅰ遺跡 21本江大坪Ⅱ遺跡  
 22本江畑田Ⅰ遺跡 23本江畑田Ⅱ遺跡 24本江宮田遺跡 25嶋田遺跡 26下条A遺跡 27下条B遺跡 28島前田遺跡  
 29布目沢遺跡 30布目沢Ⅱ遺跡 31布目沢北遺跡 32布目沢東遺跡 33布目沢苗島遺跡 34堀内遺跡 35島前田遺跡  
 36島前田南遺跡 37小泉遺跡 38水戸田遺跡 39水戸田神明堂遺跡 40小杉流団No.1遺跡 41小杉流団No.2遺跡  
 42小杉流団No.3遺跡 43小杉流団No.4遺跡 44小杉流団No.5遺跡 45小杉流団No.6遺跡 46小杉流団No.7遺跡  
 47小杉流団No.7北遺跡 48小杉流団No.9遺跡 49小杉流団No.11遺跡 50小杉流団No.16遺跡 51小杉流団No.17遺跡  
 52小杉流団No.18遺跡 53小杉流団周辺C遺跡 54小杉流団周辺D遺跡 55小杉丸山遺跡 56生源寺遺跡 57生源寺Ⅱ遺跡  
 58生源寺Ⅲ遺跡 59生源寺新B遺跡 60生源寺新C遺跡 61生源寺新遺跡 62生源寺南古墳 63生源寺南遺跡  
 64生源寺新十三塚遺跡 65南郷中学南古墳 66市井泓田遺跡 67円池遺跡 68荒町遺跡 69本村遺跡 70車田新遺跡  
 71大塚古墳 72牧田遺跡 73市井東遺跡 74石名山築跡

第1表 大門町周辺遺跡

番号	遺跡名	年代時代	遺跡
1	二口池先遺跡	弥生中、弥生後、弥生終、古墳前、飛鳥白鳳、古代、中世	弥生中散布地、弥生後集落、弥生終集落、古墳前古墳、古墳前集落、飛鳥白鳳散布地、古代集落、中世集落、近世散布地
2	二口瓦屋田遺跡	弥生中、弥生後、古代、中世、近世	弥生散布地、古墳前散布地、古代散布地、中世散布地、近世散布地
3	二口西遺跡	弥生中、弥生後、古代、近世	弥生散布地、古代散布地、近世散布地
4	八幡八遺跡	中世、近世	中世集落、近世散布地
5	八幡色遺跡	縄文、弥生、古墳、古代	縄文散布地、弥生散布地、古墳前散布地、古代散布地
6	八幡色遺跡	縄文、弥生後、古代、中世、近世	縄文散布地、弥生後散布地、古代散布地、中世集落、近世集落
7	八幡土田遺跡	古代	古代散布地
8	小幡南遺跡	不明	不明散布地
9	二口遺跡	縄文後、弥生中、古墳前、古代、中世、近世	縄文後集落、弥生散布地、古墳前散布地、古代集落、中世集落、近世集落
10	中口-C3遺跡	弥生中、弥生後	中世集落、散布地、近世集落、散布地
11	菅野遺跡	縄文、弥生、古代、中世、近世	縄文散布地、弥生散布地、古代集落、中世集落、近世集落
12	菅野I遺跡	中世、近世	中世散布地、近世散布地
13	赤井西遺跡	古代、中世	古代散布地、中世散布地
14	赤井南遺跡	古代、中世	古代散布地、中世散布地
15	赤井水田遺跡	古代、中世、近世	古代集落、中世集落、近世集落
16	赤井杉田遺跡	古代、中世	古代集落、中世散布地
17	赤井畑田遺跡	弥生後、古墳、古代、中世、近世	弥生後集落、古墳前散布地、古代集落、中世散布地、近世散布地
18	赤井宮田遺跡	弥生中、弥生後、古墳前、古代、中世、近世	弥生中集落、弥生後集落、古墳前集落、古代集落、中世散布地、近世散布地
19	榎田遺跡	縄文、古墳、古代、中世	縄文散布地、古墳集落、古代集落、中世集落
20	本江大坪I遺跡	古代、中世	古代集落、中世集落
21	本江大坪II遺跡	古代、中世	古代集落、中世集落
22	本江畑田I遺跡	縄文、弥生後、古墳前、古代、中世、近世	縄文集落、弥生後集落、古墳前集落、古代集落、中世集落、近世集落
23	本江畑田II遺跡	古代、中世、近世	中世集落、古代集落、中世集落、近世集落
24	本江宮田遺跡	弥生中、弥生後、古代、中世、近世	弥生中集落、古墳前散布地、古代散布地、中世集落、近世散布地
25	榎田遺跡	縄文、弥生、古墳、古代、中世	縄文散布地、弥生集落、古墳集落、古代集落、中世散布地
26	下倉久遺跡	不明	不明
27	下倉B遺跡	中世	中世散布地
28	島野田遺跡	縄文、弥生後、平安、中世	縄文集落、弥生後集落、平安集落、中世集落
29	布目沢遺跡	縄文、弥生後、古代、中世	縄文散布地、弥生後散布地、古代散布地、中世集落
30	布目沢I遺跡	弥生後、中世	弥生後集落、中世集落
31	布目沢北遺跡	縄文前、縄文後、弥生前、弥生中、弥生後、弥生終、古墳前	縄文前散布地、縄文後散布地、弥生前散布地、弥生中散布地、弥生後集落、弥生終集落、古墳前集落、古代集落、中世集落、近世集落
32	布目沢東遺跡	縄文後、縄文後、古墳、平安、中世、近世	縄文後集落、縄文後集落、古墳前散布地、平安散布地、中世散布地、近世散布地
33	布目沢西遺跡	縄文、弥生、古墳、中世	縄文散布地、弥生散布地、古墳前散布地、中世散布地
34	堤内遺跡	弥生中、中世	弥生中散布地、中世散布地
35	島野田遺跡	弥生中、中世	弥生中散布地
36	島野田西遺跡	不明	不明散布地
37	小幡遺跡	縄文前、縄文中、古代、中世、近世	縄文前散布地、縄文中散布地、古代集落、中世集落、近世散布地
38	水戸田遺跡	古代	古代散布地
39	水戸野神明堂遺跡	縄文、弥生後、古代	縄文散布地、弥生後散布地、古代散布地
40	小幡遺跡NO.1遺跡	弥生終、古墳	弥生後集落、古墳集落
41	小幡遺跡NO.2遺跡	不明	不明散布地
42	小幡遺跡NO.3遺跡	縄文中、古墳	縄文中集落、古墳古墳
43	小幡遺跡NO.4遺跡	縄文後、縄文後、古墳	縄文後散布地、縄文後散布地、古墳集落
44	小幡遺跡NO.5遺跡	縄文	縄文散布地
45	小幡遺跡NO.6遺跡	旧石器、縄文中、縄文後、古墳後、古代	旧石器散布地、縄文中散布地、縄文後散布地、古墳後集落、古墳後、古墳後、古墳後
46	小幡遺跡NO.7遺跡	縄文中、縄文後、古墳後、奈良、平安	縄文中集落、縄文後集落、古墳後集落、古墳後集落、奈良集落、平安集落
47	小幡遺跡NO.7-2遺跡	縄文中、古墳、中世	縄文中集落、古墳古墳、中世散布地
48	小幡遺跡NO.9遺跡	縄文	縄文散布地
49	小幡遺跡NO.11遺跡	旧石器、縄文、古墳	旧石器散布地、縄文中散布地、古墳古墳
50	小幡遺跡NO.16遺跡	縄文中、古墳、奈良	縄文中散布地、古墳後集落、奈良集落、奈良集落
51	小幡遺跡NO.17遺跡	縄文、縄文後、弥生後、古墳中	縄文中散布地、縄文後散布地、弥生後散布地、古墳中古墳
52	小幡遺跡NO.18遺跡	縄文中、縄文後、奈良	縄文中散布地、縄文後散布地、奈良集落、奈良集落
53	小幡東田原宮古墳	古代	古墳散布地
54	小幡東田原宮古墳	古代	古墳散布地
55	小幡丸山遺跡	旧石器、縄文中、縄文後、弥生中、弥生後、古墳前、飛鳥白鳳、古代、中世、近世	旧石器散布地、縄文中集落、縄文中散布地、縄文後散布地、弥生中その他、弥生後集落、弥生後その他、弥生終その他、古墳前その他、飛鳥白鳳集落、飛鳥白鳳集落、古代集落、古代集落、中世散布地、近世散布地
56	生瀬寺遺跡	奈良、平安、中世、近世	奈良集落、平安散布地、中世散布地、近世集落
57	生瀬寺I遺跡	古墳、古代、平安	古墳散布地、古代散布地
58	生瀬寺II遺跡	古代	古代散布地
59	生瀬寺南田遺跡	縄文中、古墳、古代、中世	縄文散布地、古墳前散布地、古代散布地、中世散布地
60	生瀬寺野中遺跡	古代	古代散布地
61	生瀬寺野中遺跡	縄文中、縄文後、古代、中世	縄文中集落、縄文後散布地、古代散布地、中世散布地
62	生瀬寺南古墳	古墳	古墳古墳
63	生瀬寺南遺跡	古代	古代散布地
64	生瀬寺新十三塚古墳	古墳	古墳古墳
65	南郷中津南宮遺跡	古墳	古墳古墳
66	市井丸田遺跡	中世、近世	中世散布地、近世散布地
67	円池遺跡	弥生中、古代	弥生中散布地、古代散布地
68	瓦町遺跡	古墳	古墳散布地
69	本村遺跡	古墳	古墳散布地
70	幸田新遺跡	旧石器、縄文中、縄文中、縄文後、弥生後、古墳前	旧石器散布地、縄文中集落、縄文中散布地、縄文後散布地、縄文後散布地、弥生後集落、弥生後集落、古墳前散布地、中世散布地、近世散布地
71	大塚宮遺跡	古墳	古墳古墳
72	後田遺跡	縄文、古代、中世、近世	縄文散布地、古代散布地、中世散布地、近世散布地
73	赤ノ井原遺跡	奈良、近世	奈良散布地、近世散布地
74	石名山遺跡	古墳後、奈良	古墳後集落、奈良集落

## 第2章 調査の概要

### 1. 調査に至る経緯

大門町では、平成13年度より大門町立統合幼稚園の建設事業を計画、平成16年度から着工した。事業は、昨今の少子化による児童数の減少から、大門町内に点在する3箇所の町立幼稚園を統合するもので、大門小学校の東側の田、敷地面積約6,000㎡の中に約2,000㎡の園舎を建設するものである。

この敷地は、平成5年度に実施した試掘調査（大門町教育委員会1997）により、埋蔵文化財包蔵地であることを確認している。

町教育委員会は、極力、盛土によって埋蔵文化財を保存する方針で事業に取り組んだが、保護措置が難しい園舎部分については、工事に先立って本調査を実施し、記録保存することとした。

### 2. 調査の経過

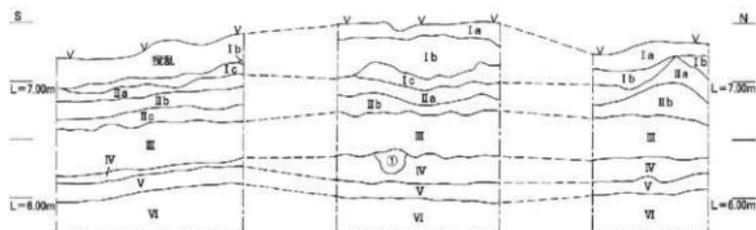
平成16年11月2日～11月15日にかけて、事前準備として調査地周辺に基準点の設定と調査区の境界測量を行い、また、重機掘削を行うにあたっての使用重機の選定、掘削方法、残土処理の方法などについて打ち合わせを行った。掘削範囲は、園舎部分にあたる2,060㎡が対象となった。11月16日～11月30日にかけて、ロードマットを敷設した後、0.7㎡級のバックホウ2台と0.45㎡級のバックホウ1台、10t級のクローラードンプ1台を使用し、遺構面直上まで重機掘削を行った。掘削深度は平均1.0mであった。重機掘削中に遺構の広がりや、X=80410.00付近から南で途切れることから、町教育委員会と協議を行い、調査面積を2割程度縮小することになった。重機掘削終了後、調査区内に10m間隔で測量杭を打設し、その後調査区周壁の崩落防止と作業の安全を確保するために、コンパネ、6尺杭、2mの短管パイプ、鋼索線を用いて土止め措置を行った。12月1日より18名の作業員で、側溝及び排水溝掘削を行った。12月6日にベルトコンベアーを導入し、翌7日から遺構検出及び遺構掘削作業を行った。検出及び掘削した遺構は全てトータルステーションを用いて測量を行った。遺構は、半裁もしくは中央に畦を設定した状態で掘削し、土層断面観察及び記録写真撮影、土層断面図を作成後、完掘を行った。また、遺構から出土した遺物は、出土状況図を作成した。全ての遺構を掘削し、記録作業を終了した平成17年1月29日に、高所作業車にて調査区の全景写真を撮影した。撮影終了後、西壁の基本層序を3箇所で作成し、土止めに使用した資材などの撤去を開始した。2月14日、発掘調査に使用した全ての器材・道具を撤収し、現地での発掘調査を終了した。

整理作業は、緊急雇用創出特別基金事業であったことから、平成16年12月28日に整理作業員10名の募集を、ハローワークを通じて行った。平成17年1月6日から、本格的に整理作業を開始し、まずは遺物の洗浄から行った。洗浄後は、土器に酸化処理を施し、ジェットマーカーを使用して注記を行った。その後、遺物の接合、復元、実測100点を平成17年3月14日まで継続的に行いながら、同時に、遺構図版、遺物図版を作成し、報告書掲載用にそれぞれの図版のトレースと文章の執筆を行った。各種台帳を作成し、平成17年3月29日に、報告書の印刷終了をもって全ての整理作業を終了した。

### 3. 基本層序

基本層序は、I a層：黒色シルト質粘土(表土)・I b層：褐灰色シルト質粘土(耕土)・I c層：明黄褐色シルト質粘土(床土)、II a～II c層：オリーブ灰色シルト質粘土(古代・中世遺構面)、III層：黒褐色シルト質粘土(古墳時代前期初頭遺物包含層)、IV層：明緑灰色粘土(弥生時代後期終末期～古墳時代前期初頭遺構検出面)、V層：黒色粘土(植物遺体層)、VI層：オリーブ灰色シルト、①層：黒褐色シルト質粘土に明緑灰色粘土に斑に少量混じるもの

(遺構埋土)である。IV層は調査区北側から南側に向かって緩やかに傾斜し、X=80410.00付近から南では遺構が確認できなくなる。II層は、平成5年度の試掘調査の結果、古代・中世の遺構が確認されていたが、耕作土または床土直下であり、また現況地盤が軟弱であったことから、重機掘削を行っている時点で遺構の存在を確認することが極めて困難な状況になった。そのため詳細は不明だが、試掘調査や第1次から第3次までの本調査の結果を踏まえて、便宜的ではあるが、II層全体を古代・中世遺構面として扱っている。



第3図 基本層序 (1:40)

## 第3章 調査の成果

### 1. 遺構の概要

#### (1) 検出遺構

全部で66の遺構を検出した。内訳は、土坑27基、溝4条、ピット35基であり、主にX=80410.00付近から北で検出できた。調査区内の北側および西側では比較的土坑や溝が、東側ではピットが多く検出された。南側には、現況とは逆で北から南に向かって緩やかに低くなる落込みが確認でき、その肩部付近の埋土からまとまった状態で土器が出土した。基本層序のIII層を主体とする落込みの埋土は、調査区南端に向かうほど徐々に厚くなりながら堆積している。

調査区全体で見ると、西側及び北側からは遺物を多量に含む遺構が数箇所で見つかったが、その他の遺構からは遺物は出土しなかった。遺構の埋土はほぼ単層で、黒褐色シルト質粘土に明緑灰色粘土が斑に少量混じるものであった。遺物を包含していた遺構の深度は、0.4m～0.16mであったが、遺物を包含していなかった遺構の深度は、約0.1m程度と浅く、削平を受けた可能性が考えられる。削平された時期は、次に当地で集落が形成されるまでの間で、古墳時代前期～古代までの間と考えられる。

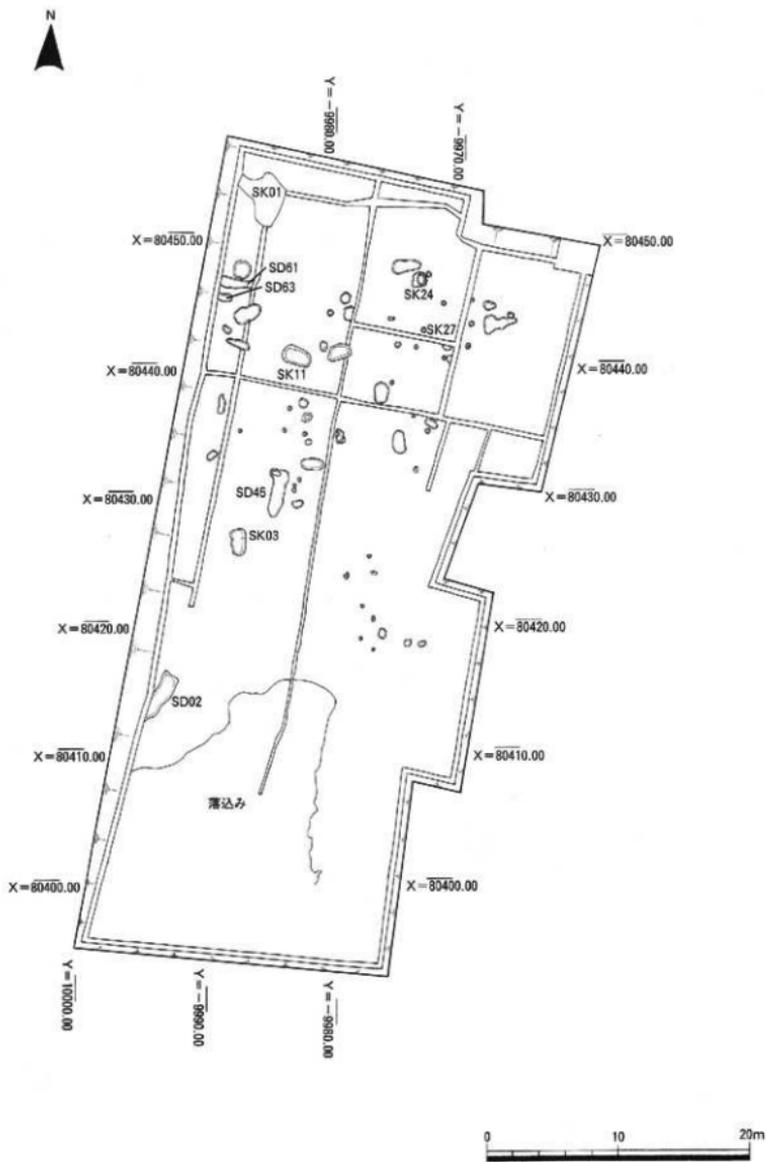
検出した主な遺構の時期は、弥生時代後期末期「月影式期」の器台御裾部片を出土したSK24を除けば、概ね古墳時代前期初頭の「古府ケルビ式期」の範疇に該当すると思われる。

今回の調査区内からは、第1次から第3次調査において確認されていた、竪穴式住居、平地式建物、掘立柱建物、井戸などの日常生活に直接伴う遺構がなかったことや、出土遺物の内、木製品や石製品、鉄製品が出土せず、ほとんどが土器であったこと、さらに、今調査区が二口油免遺跡の南端に推定されていたことも踏まえると、当調査区は居住区域ではなく、集落南側の縁辺部に当たると考えられる。

以下に各遺構の詳細を、土坑、溝、ピットの順で述べていく。

#### (2) 土坑

土坑は、調査区北半分から満遍なく検出した。長軸は4.0m～0.6mまでの大きさで、深度は0.4m～0.1mを測る。断面形態は、逆台形状もしくは方形を呈する。ほとんどの土坑からは遺物が出土せず、その性格は不明だが、長軸



第4図 遺構全体図 (1:400)

が2.0mを超える大型の土坑から、多量の遺物が出土するという傾向は、第1次調査において確認された、長軸が共に約2.8m前後で深度0.5m～0.3mを測る、SK118・146と同じと考えられる。

#### SK01

調査区北西隅で検出した。平面形態は、ほぼ南北に軸を持ち、長軸4.0m、短軸2.0mを測る、大型で歪な楕円形の土坑である。検出した遺構の中で最も遺物の出土量や器種が多く、復元をした結果、ほぼ完形になるものが多かった。検出時は、SK01につながり、北西―南東方向に軸を持ち、調査区外へ伸びる溝も確認できたが、激しい湧水のため遺構の輪郭が崩れたのに加えて、掘削することも出来ない状態になった。結果、この溝とSK01との切合い関係や、またそれぞれの埋土の堆積状況、深度、遺物の出土状況などを記録することが出来なかった。

遺物は、古府クルビ式期の甕・小型甕・複合口縁壺（赤彩）・台付細頸壺（赤彩）・小型台付鉢（赤彩）・有孔鉢・片口鉢、石材（粗悪ではあるが翡翠原石）が出土した。月形式期の甕の口縁部（第7図-1）が、1点のみ出土しているが、切合い関係が不明の溝から出土した可能性が考えられる。土器の復元後、口縁部や体部、底部あるいは底部付近を意図的に破砕したと思われる痕跡があったことから、SK01は、集落内あるいはその周辺で何らかの祭祀行為を行った後、その際使用した土器の捨て場、大型の廃棄土坑と考えられる。

#### SK03（第5図及び第8図）

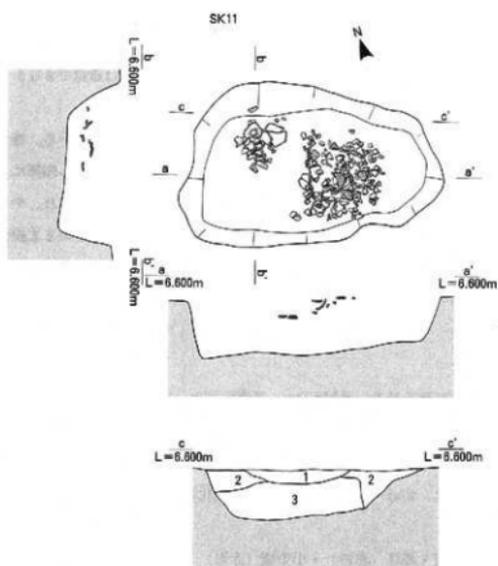
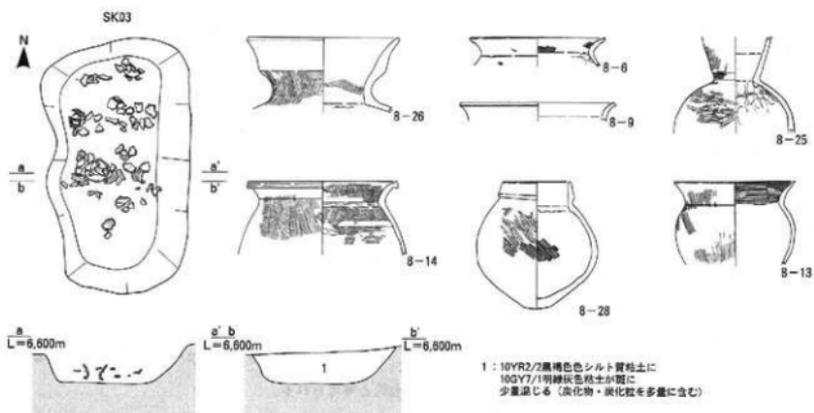
調査区中央西側で検出した。平面形態は、南北方向に軸を持ち、長軸2.1m、短軸1.14m、深度0.32mを測る、歪な隅丸方形の土坑である。断面形態は、逆台形状を呈する。埋土は単層で、黒褐色シルト質粘土に明緑灰色粘土が斑に少量混じるものであった。3mm～1mm大の木炭および炭化粒が多量に含まれていたが、他に焼土などは確認できなかった。

遺物は一括出土で、古府クルビ式期の甕・複合口縁壺・直口壺・細頸壺が遺構内から満遍なく出土している。複合口縁壺（第5図及び第8図-26）は、遺構のほぼ中央西側、低面の直上から正位置で出土した。口縁部から頸部にかけての部位のみ、体部から底部までの部位はなかった。また、その他の土器も破砕された状況で出土しており、やはり完形に復元できるものは無かった。これらのことを考えると、日常生活で使用した際に壊れた土器をそのまま投棄したと考えられる。赤彩された土器が出土しなかったことから、SK01とは遺構の性格に違いがあり、日常生活を行う上での廃棄土坑と考えられる。

#### SK11（第5図及び第8図）

調査区北西側で検出した。平面形態は、東西方向に軸を持ち、長軸2.11m、短軸1.36m、深度0.4mを測る、不整形の方角土坑である。断面形態は、逆台形状を呈する。埋土は3層に分かれており、1：黒褐色シルト質粘土に明緑灰色粘土が斑に少量混じるもの、2：1層にオリブ灰色シルト質粘土が混じるもの、3：黒色粘土に暗オリブ灰色粘土が斑に混じるもの、であった。それぞれの層には、40mm～1mm大の木炭および炭化粒が多量に含まれていたが、他に焼土などは確認できなかった。

遺物は、古府クルビ式期の大型甕・甕・複合口縁壺・高環（赤彩）・小型壺（赤彩）・小型器台（赤彩）が、遺構の北西隅及び中央東寄り、遺構検出レベルから下に0.3mの間で出土しており、底面及び底面直上からは出土していない。北西隅からは、比較的破片の大きな土器が出土しており、復元すると口縁部から底部付近までの複合口縁壺（第5図及び第8図-29）が、逆位置で出土している。その他の土器も破砕された状況で出土しており、やはり完形に復元できるものはなかった。赤彩された土器が出土していることや、その他土器の出土状況から判断して、土器は



第5図 SK03・11遺構平面図・断面図 (1:40)

完形のままて投棄したのではなく、事前に全て破砕して投棄したと考えられることから、SK01と同様の意味を持つ可能性がある廃棄土坑と考えられる。

#### SK24 (第6図及び第8図)

調査区北側で検出した。平面形態は、北東—南西方向に軸を持ち、長軸1.3m、短軸1.1m、深度0.32mを測る、若干不整形だが円形に近い土坑である。断面形態は、方形状でかつ2段に落ち込む形状を呈する。埋土は、SK11と同様3層に分かれており、1：黒褐色シルト質粘土に明緑灰色粘土が斑に混じるもの、2：黒色シルト質粘土にオリブ灰色シルト質粘土がブロック状に混じるもの、3：黒色粘土に暗オリブ灰色粘土が斑に混じるものであった。それぞれの層には、3mm～1mm大の木炭および炭化粒が多量に含まれていたが、他に焼土などは確認できなかった。

遺物は、月形式期の器台裾部片(第6図及び第8図-19)が、遺構のほぼ中央の底面直上から、内面を上にした状態で1点のみ出土した。この破片と同一固体のものは、今回の調査区からは1点も出土しなかった。出土状況から判断して、単純に埋土に混入していたものと考えられる。

#### SK27 (第6図及び第8図)

調査区中央東側で検出した。遺構検出を行う前に排水溝を掘削したことによって、遺構の正確な平面形態は分からなくなってしまったが、平面形態はおそらく東西方向に軸を持ち、長軸0.76m、短軸0.34m、深度0.16mを測る、楕円形もしくは隅丸方形の土坑であろうと考えられる。断面形態は、長方形を呈する。埋土は単層で、黒褐色シルト質粘土に明緑灰色粘土が斑に混じるものである。3mm～1mm大の木炭および炭化粒が多量に含まれていたが、他に焼土などは確認できなかった。

遺物は、おそらく古府クルビ式期で、外面にハケメを施した甕の体部片が3点のみ出土した。出土レベルが、埋土表面よりやや下であったことや出土状況から判断して、単純に埋土に混入していたものと考えられる。

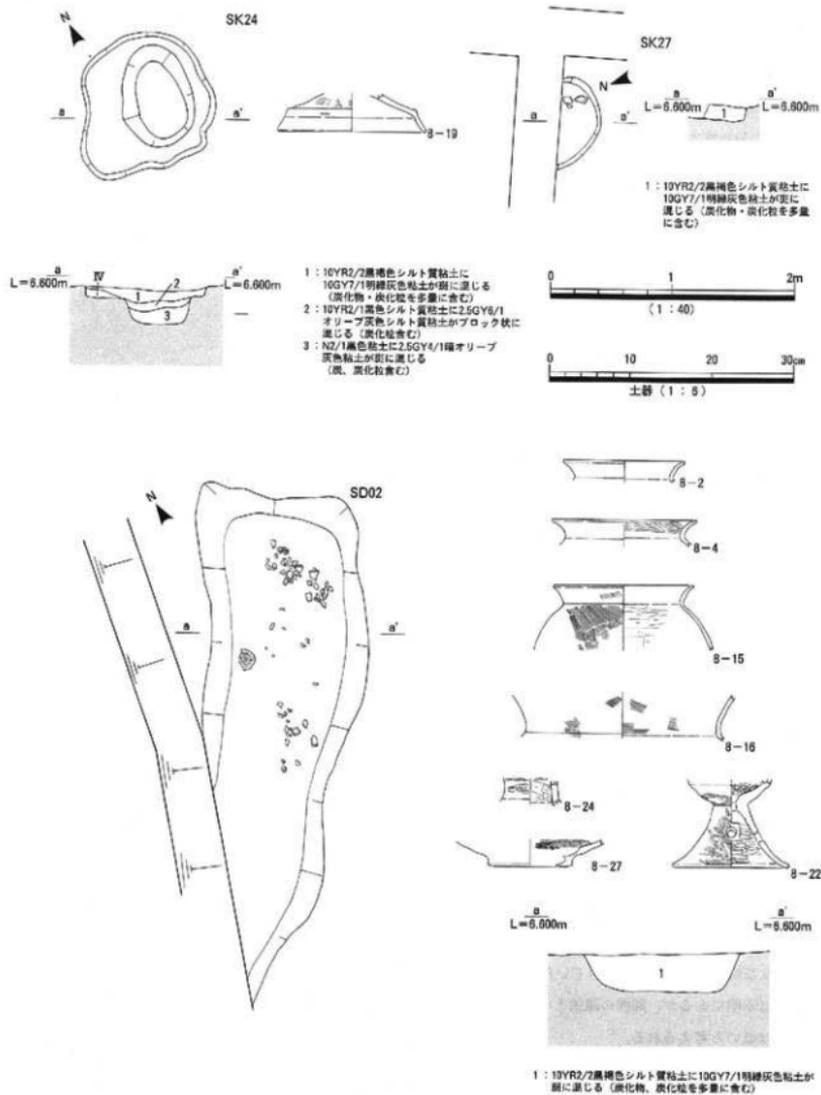
#### (3) 溝

溝は、調査区西側で検出し、東西方向(SD61・63)、南北方向(SD45)、北東—南西方向(SD02)の3方向に軸を持つものであった。SD45を除き、その他の溝は全て調査区外へ延びるため、全体像は不明である。第1次から第3次調査において検出した溝は、方形ないしは円形の区画溝や竪穴式住居および平地式建物の周溝が多かったが、今回検出した溝には、出土遺物や周辺の遺構との関係から判断して、区画溝や住居に伴うものではないと考えられるが、詳細な性格は不明である。

#### SD02 (第6図及び第8図)

調査区南西側で検出した。平面形態は、北東—南西方向に延び、長さ4.2m、幅1.2m、深度0.3mを測る。断面形態は、逆台形を呈する。埋土は単層で、黒褐色シルト質粘土に明緑灰色粘土が斑に混じるものである。3mm～1mm大の木炭および炭化粒が多量に含まれていたが、他に焼土などは確認できなかった。南西側が調査区外に延びているため、全体像は不明であるが、周囲の遺構との関係、また出土した遺物やその出土状況から、区画溝や住居、古墳の周溝の可能性は低いと考えられる。

遺物は一括出土で、古府クルビ式期の大型甕・甕・壺頸部・壺底部・器台が出土した。現状で、溝の中央付近から先端までの範囲から、全て破砕した状態で出土しており、いずれも完形に復元できるものはなかった。また赤彩された土器は出土しなかった。出土遺物、出土状況から判断して、意図的に埋置されたものではなく、日常生活で使用し



第6図 SK24・27、SD02遺構平面図・断面図 (1 : 40)

た際に壊れた土器をそのまま投棄したと考えられる。

#### (4) ビット

ビットは調査区全体で満遍なく検出したが、掘立柱建物や櫛列を構成するものはなかった。長軸は、0.52m～0.15mで、深度は0.28m～0.07mを測る。埋土は、単層あるいは2層である。単層の場合は、黒褐色シルト質粘土に明緑灰色粘土が藍に混じるもの(①)で、2層の場合は、①と明緑灰色粘土に黒色粘土が少量混じるものである。土層断面観察の結果、柱根あるいは柱の痕跡を残すものがなかったことから、ビットを廃棄する際に、柱根は全て引き抜いていたと考えられる。

遺物は、壺もしくは蓋の小破片のみで詳細な時期は不明だが、埋土に混入していたものと考えられる。

## 2. 出土遺物

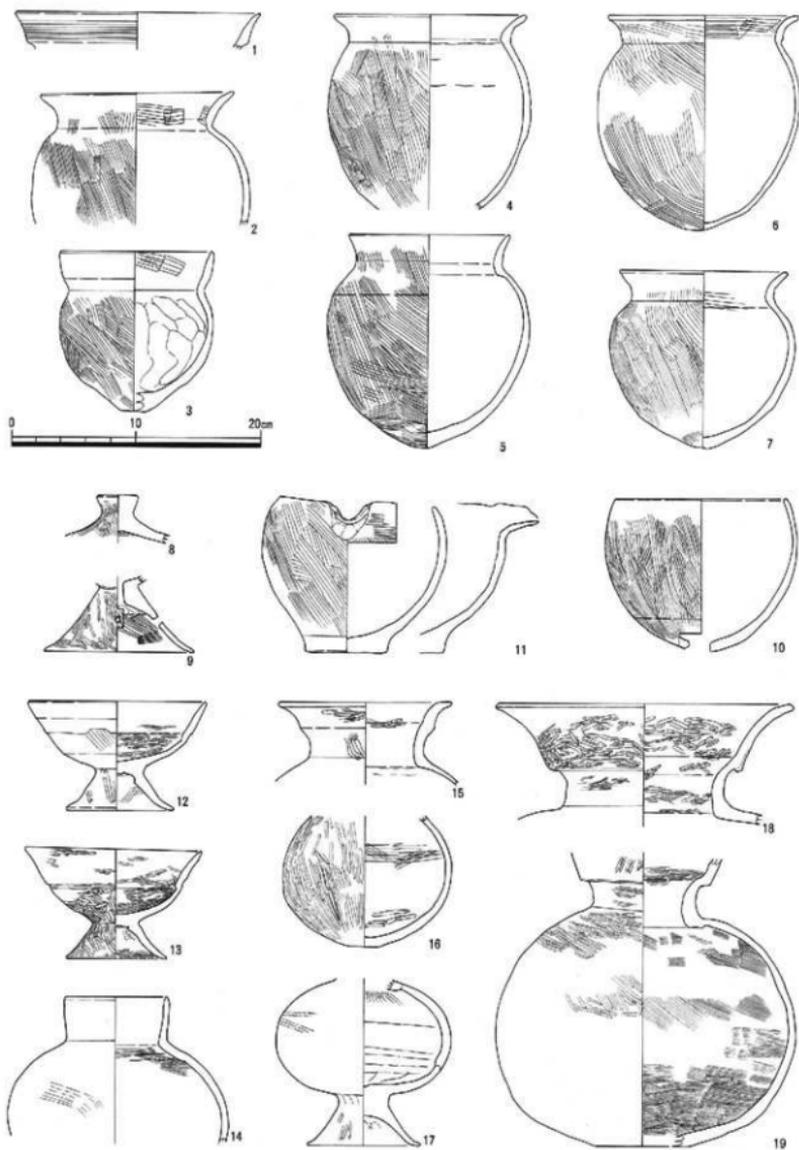
出土した遺物は、古式土師器(大型甕・甕・小型甕、複合口縁壺・広口壺・直口壺・細頸壺・短頸壺・合付壺、蓋、高坏、器台・小型器台、鉢・合付鉢・有孔鉢・片口鉢)、石材(翡翠祖恵原石)がある。遺構出土遺物は一括出土のものもあり、器種も豊富である。弥生時代後期終末の月形式期を上限とし、おおむね古墳時代前記初頭の古府クルビ式期を中心とする時期である。以下に、遺構出土、包含層出土ごとに詳細を述べていく。

### 第7図(1～19) SK01出土

1～7は甕である。1は口縁部のみで、外傾しながら端部を細く丸く納める。外面は、掘凹線を浅く施し、また煤が付着する。時期は、月形式期の範疇に該当すると思われる。2の口縁部は、内面中央付近を肥厚させ、頸部からやや強めに外反しながら、端部をやや細く丸く納める。内面には、板ナデの調整を施す。体部は、中央付近で最大径を測り、外面はハケメを施し、内面はヘラケズリ後ナデを施す。口縁部と体部外面に煤が付着する。3は小型甕である。口縁部は厚めで、やや内湾する傾向を持ちながら直線的に伸び、端部を細く納める。内面は板ナデを施す。体部は、中央付近で最大径を測り、外面はハケメを施し、内面は縦方向の指ナデを施す。底部は平底で、わずかに凹みを呈する。体部から底部にかけて外面に煤が、内面にコゲが付着する。胎土が赤く変色していることから、日常生活において煮沸に使用されていたものと考えられる。4の口縁部は、頸部からやや強めに外反しながら端部を厚く丸く納める。体部は、中央付近で最大径を測り、外面はハケメを施す。内面はヘラケズリ後ナデを施すが、粘土紐接合痕が残る。また、体部内面にはコゲが付着する。5の口縁部は、頸部からやや緩やかに外反しながら、端部を細く丸く納める。体部は、中央やや上で最大径を測り、外面はハケメを施し、内面はヘラケズリ後ナデを施す。底部は尖底を呈する。底部外面に煤が、体部内面にコゲが付着する。6は能登形甕である。口縁部は、頸部から外反し、端部は面を持つ。内面は板ナデを施す。体部は、中央やや上で最大径を測り、外面は粗いハケメを施し、内面はヘラケズリ後ナデを施す。底部は丸底を呈する。口縁部から底部にかけて外面に煤が付着する。7は小型甕である。口縁部はやや厚めで、頸部から緩やかに外反しながら、端部を丸く納める。体部は、中央やや上で最大径を測り、外面はハケメを施し、内面はナデを施す。底部は尖底を呈する。体部から底部にかけて外面全体に煤が付着するものの、内面にコゲは見られない。液体もしくは固形物をほとんど含まないものを煮沸したと思われる。

8は蓋である。紐部は逆〇を呈し、紐頂部は平坦に成形しミガキを施す。体部は、内外面ともに丁寧なミガキを施す。

9は小型器台の脚部である。裾端部まで「八」の字状に緩やかに広がりながら、端部は少し尖り気味に納める。欠損のため詳細は不明だが、おそらく4方向の円形孔を穿つ。外面はミガキを施し、内面は指頭尻脛と板ナデを施す。



第7図 SK01出土遺物(1:4)

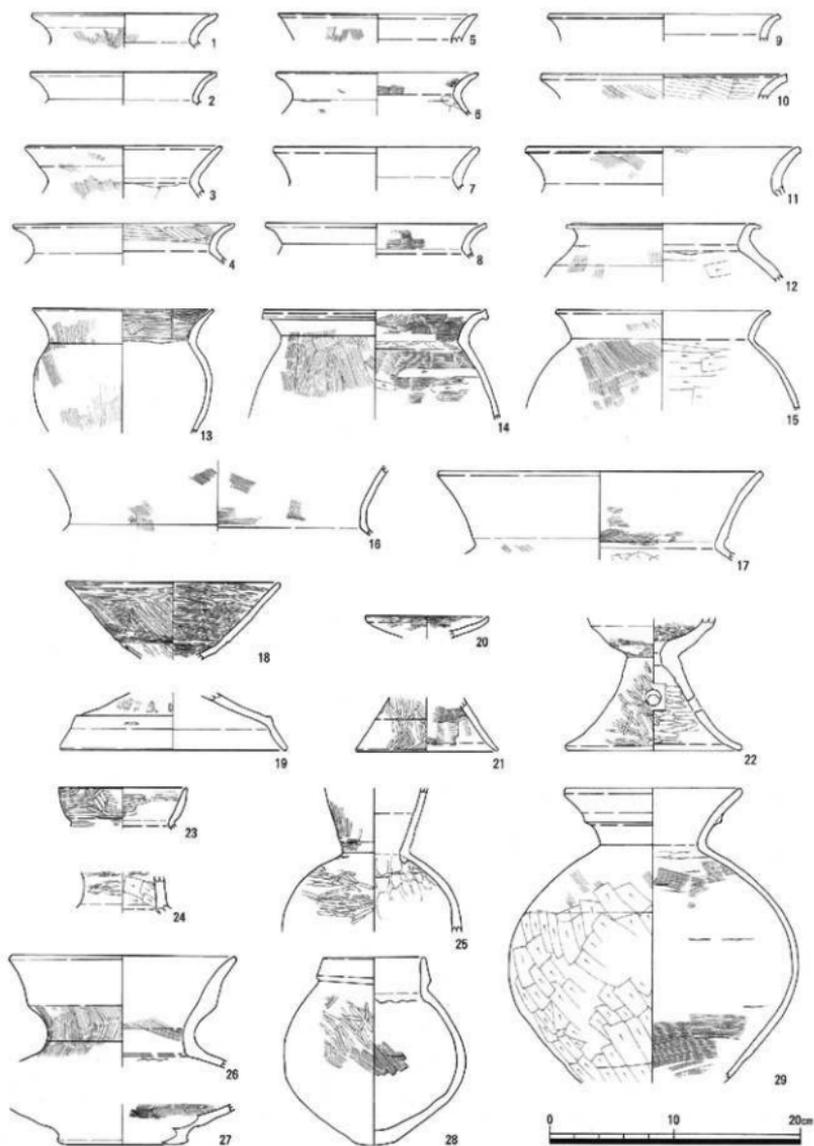
また、外面全体に赤彩を施す。

10～13は鉢である。10は有孔鉢である。体部は丸みを帯び、ほぼ中央で最大径を測る。外面は丁寧なハケメを施し、内面はヘラケズリ後ナデを施す。孔は単孔で、焼成前に外から内に向かって穿孔する。11は片口鉢である。近隣の遺跡からはあまり類例の無い器種である。注ぎ口は、体部を成形する際に余分な粘土を外側に擠み出したものではなく、体部成形後に貼付けたもので、接合部を指で粗くナデる。体部は丸みを帯び、中央やや上で最大径を測る。外面は粗いハケメを施し、内面はナデを施す。意図的に破砕したと思われる痕跡が体部に見られる。底部は平底だが、体部の大きさと比べると大きい。これは、中に液体を入れた状態でも安定して自立するためのものと考えられる。12と13は有段口縁を持つ台付鉢である。12は、鉢部は直線的に外傾する口縁部を持ち、端部は細く丸く納める。段部は粘土を貼付けて粗く成形している。外面は著しく磨耗しているが、おそらく内面と同様ミガキを施す。台部は、「八」の字状に広がりながら、端部付近でさらに外側に屈曲し、端部はやや尖り気味に納める。外面はミガキを施し、内面は板ナデを施す。13は、鉢部の底部から丸みを帯びた体部を持ち、口縁は緩やかに外反しながら、端部はやや尖り気味に納める。段部は、ヘラ状もしくは棒状工具を用いて、沈線を施すことで形成する。台部は、「八」の字状に広がりながら、端部付近でやや外側に屈曲し、端部はやや尖り気味に納める。台部も含め、内外面ともに丁寧なミガキを施す。

14～19は壺である。14は短頸壺である。頸部から直線的に立ち上がる口縁部を持ち、端部付近で若干肥厚し、端部を尖り気味に納める。体部は、おそらく中央付近で最大径を測り、内外面ともにハケメを施す。15は有段口縁壺である。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し、口縁端部は外側に強く屈曲する。磨耗は著しいが、内外面ともにミガキを施す。外面全体と頸部から口縁端部にかけて内面に赤彩を施す。16は口縁部を欠損しているが、体部の形状からおそらく直口壺と考えられる。外面は丁寧なミガキを施し、内面は上方に板ナデと底部付近にヘラ状工具によるナデを施す。17は台付細頸壺である。体部は中央で最大径を測り、磨耗が著しいが、体部と台部の外面はミガキを施す。台部は、「八」の字状に広がり、端部付近で屈曲しながら端部を丸く納める。外面全体に赤彩を施す。また、内面には、肩部から頸部付根にかけて漆膜が付着している。18は山陰系の影響を受ける大型の複合口縁壺である。短く直線的に立ち上がる頸部に、口縁部は口縁部下端を突出させ、外反しながら端部を丸く納める。内外面ともに丁寧なミガキを施す。19は複合口縁壺である。短く立ち上がる頸部を持ち、口縁部は外傾する。体部は中央で最大径を測り、底部は平底を呈する。器型は若干歪みを持つが、外面のミガキや内面のハケメは丁寧に施す。外面全体に赤彩を施し、内面は黒色化する。

#### 第8図(1～29) SK03・11・24、SD02出土

1～17は甕である。1は頸部からやや強めに外反しながら、端部を丸く納める。外面はミガキを施し、内面は板ナデを施す。外面に煤が、内面に吹きこぼれが付着する。2は能登形甕である。頸部から外反しながら、端部内面を若干肥厚させつつ面を持つ。3は頸部から強めに外反し、端部はやや細く尖り気味に納める。外面はハケメを施し、内面はヘラケズリ後丁寧なナデを施す。4は頸部から外反しながら、端部は受口気味に成形する。内面は板ナデを施す。5は頸部から緩やかに外傾する厚めの口縁を持ち、端部は尖り気味に納める。外面はハケメを施す。6は頸部から強めに外反しながら、端部は外面で若干肥厚し、尖り気味に納める。外面は磨耗しているが、ハケメの痕跡が見られる。内面は板ナデとヘラケズリ後ナデを施す。内面に吹きこぼれが付着する。7はやや厚めの口縁部で、頸部から緩やかに外反しながら、端部を丸く納める。8～10は能登形甕である。8は頸部からやや強めに外反しながら、端部に面を持つ。内面は板ナデを施す。外面に煤が付着する。9は頸部から外反し、端部に面を持つ。10はほぼ均一の厚さを持ち、頸部から強めに外反しながら、端部に面を持つ。外面は粗いハケメを施し、内面は粗い板ナデを施す。11は頸部から緩やかに外反しながら、端部を丸く納める。12は能登形甕である。外面はハケメを施し、内面はヘラケズリを施



第8圖 SK03 (6・9・13・14・25・26・28)・11 (1・3~5・7・8・11・12・17・18・20・21・23・29)  
 ・24 (19)、SD02 (2・10・15・16・22・24・27) 出土遺物 (1:4)

す。外面に煤が付着する。13は小型甕である。口縁部は、頸部から直線的に外反しながら、端部を細く丸く納める。体部は中央やや上で最大径を測り、外面はハケメを施し、内面はナデを施す。口縁部と底部外面に煤が、底部内面にコゲが付着する。14・15は能登形甕である。14は頸部からやや強めに外反しながら、口縁端部は若干垂下し面を持つ。体部は、外面はハケメを施し、内面はヘラケズリ後丁寧なハケメと横方向の指ナデを施す。口縁部と体部外面に煤が付着する。15は頸部からやや強めに外反しながら、端部は若干面を持つ。体部は、外面はハケメを施し、内面はヘラケズリを施す。16・17は大型甕である。16は頸部から直線的に立ち上がり、緩やかに外反する。内外面にハケメを施す。17は、口縁部は頸部から直線的に外傾し、端部は丸く納める。口縁部内面はハケメを施す。体部は、外面はハケメを施し、内面はヘラケズリを施す。

18は高環の環部である。底部付近から直線的に外傾し、端部は丸く納める。棒状工具で外面に沈線を施すことで段部を形成し、内外面ともに丁寧なミガキを施す。また、内外面全体に赤彩を施す。

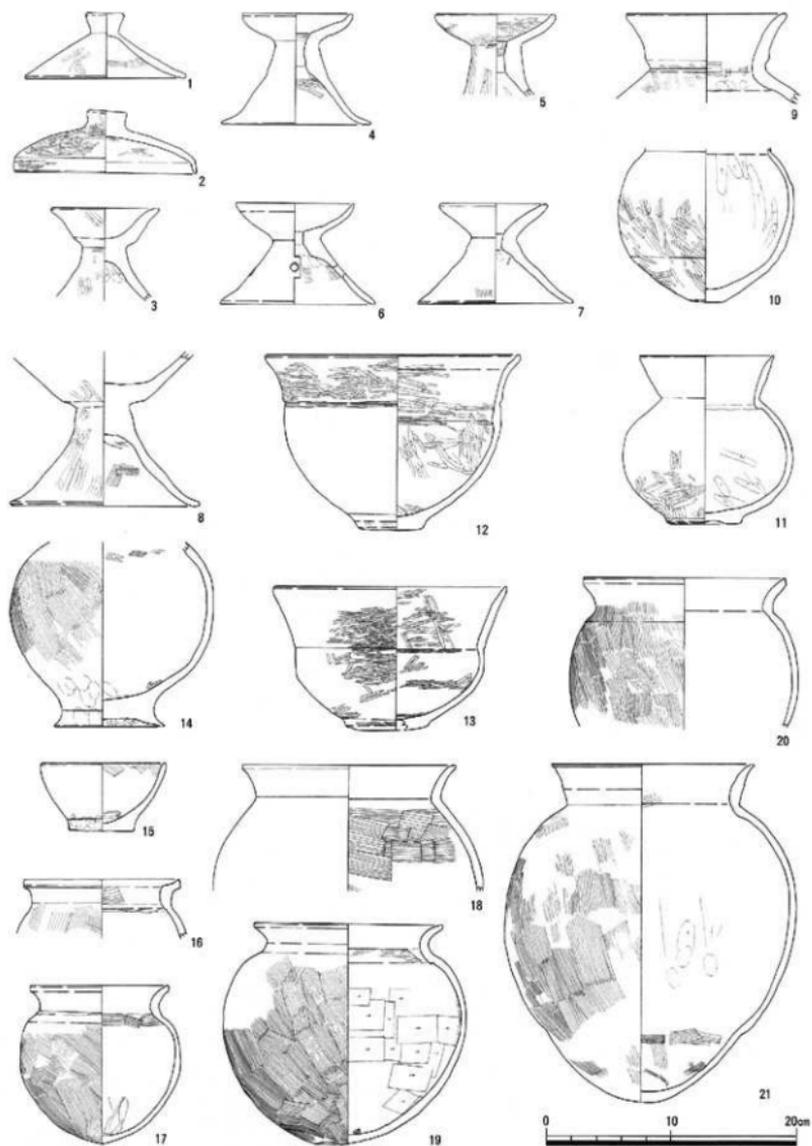
19は器台の脚部である。「八」の字状に広がりながら、途中で内側に屈曲し、端部を丸く納める。表面は磨耗しているがわずかにミガキの痕跡が見られる。時期は月形式期のもと考えられる。20は小型器台の受部である。脚部から内湾気味に浅く立ち上がり、端部はさらに内湾し丸く納める。内外面ともに丁寧なミガキを施し、また赤彩を内外面全体に施す。21は小型器台の脚部である。「八」の字状に広がり、端部を丸く納める。外面は丁寧なミガキを施し、内面は板ナデを施す。22は器台である。脚部は「八」の字状に緩やかに広がりながら、裾部で外側に若干屈曲し、端部を丸く納める。内外面ともにミガキを施し、また中央付近には4方向の円形孔を穿つ。受部は、内湾気味に立ち上がり、内外面ともにミガキを施す。

23～29は壺である。23は小型壺の口縁部である。頸部から直線的に緩く外傾しながら、外面を肥厚させ、端部を細く丸く納める。内外面ともに丁寧なミガキを施し、また赤彩を施す。小型丸底壺の可能性もある。24は壺の頸部である。外面はミガキを施し、内面はヘラケズリとハケメを施す。25は直口壺である。頸部から直線的に外傾する口縁部を持ち、外面はミガキを施す。体部は中央付近で最大径を測る標相を呈する。外面はミガキを施し、内面は指頭圧痕と指ナデを施す。26は大型の複合口縁壺である。短く直立する頸部を持ち、有段部から外傾しながら、端部を丸く納める。内外面とも頸部に丁寧なハケメを施す。27は底部である。平底の底部から広く外傾する形状を呈する。外面は磨耗のため調整は不明だが、内面は第7図一19と同様丁寧なハケメを施す。28は短頸壺である。直線的に立ち上がる口縁部で外面途中で稜を持ち、端部を丸く納める。体部は、中央付近で最大径を測り、小さな平底を呈する。外面はミガキとハケメを、内面はハケメを施す。また肩部の外面に煤が、底部と体部内面にコゲが付着する。29は山陰系の影響を受ける複合口縁壺である。頸部から強めに外反しながら広がる口縁部を持ち、端部を丸く納める。口縁下端はやや突出する。体部は中央付近で最大径を測り、外面はヘラケズリと一部ハケメを、内面はハケメを施す。

#### 第9図(1～21) 包含層出土

1・2は壺である。1は紐頂部を平坦に成形し、体部は外反しながら伸び、端部を丸く納める。表面の磨耗が著しいが、外面はミガキを施し、内面はハケメを施す。また外面全体に赤彩を施す。2は柱状の短い紐部を呈し、紐頂部は平坦に成形し、体部は内湾する。口縁部は内側に屈曲し、端部を細く丸く納める。若干の磨耗が見られるが、内外面ともに丁寧なミガキを施す。また外面全体と口縁部内側に赤彩を施す。

3～7は小型器台である。3は「小型器台が波及してきた段階での在地での模作品、ないしは在地系器台の退化系と推定されるもの」(田嶋1986)である。受部は、内湾しながら伸び、口縁端部付近で外側に屈曲し、端部を丸く納める。外面はミガキを施し、脚部内面は指ナデを施す。外面全体と受部内面に赤彩を施す。4は器厚で内湾する受部を持ち、口縁端部付近で内側にさらに屈曲し、端部を丸く納める。脚部は、受部底から外反しながら開き、裾端部付



第9図 包含層出土遺物（1：4）

近でさらに外側に屈曲しながら、端部をやや尖り気味に納める。表面磨耗が著しく、脚部内面に板ナデの痕跡のみが見られる。外面全体と受部内面に赤彩を施す。5は内湾する受部を持ち、端部を丸く納める。脚部は受部底から直線的に下方へ伸び、途中で屈曲して開く様相を呈する。内外面共に丁寧なミガキを施す。6は器縁で内湾する受部を持ち、端部を尖り気味に納める。脚部は、受部底から「八」の字状に開きながら、裾端部を尖り気味に納める。中央付近に4方向の円形孔を穿つ。表面磨耗が著しく、脚部内面に板ナデと指頭圧痕が見られる。外面全体と受部内面に赤彩を施す。7は器厚で外反気味に伸びる受部を持ち、端部を丸く納める。脚部は、受部底から「八」の字状に開きながら、裾端部を尖り気味に納める。表面磨耗が著しく、外面にハケメ、内面に指頭圧痕を施す。外面全体と受部内面に赤彩を施す。

8は畿内系あるいは東海系の影響を受ける高坏である。坏部は、途中で屈曲しながら直線的に口縁端部まで伸びる様相を呈する。脚部は坏部底から外反しながら開き、裾端部付近でわずかに屈曲し、端部を尖り気味に納める。外面はミガキを施し、内面は板ナデを施す。

9～11は壺である。9は広口壺で、頸部付近にナデによる稜を持つ。頸部から緩やかに外反しながら広がる口縁部を持ち、端部を丸く納める。外面はハケメを施し、内面は板ナデと指頭圧痕を施す。10は直口壺の体部である。器壁は薄く球形状を呈し、底部は平底を呈する。外面はミガキを施し、内面は縦方向の指ナデを施す。また外面全体に赤彩を施す。11は直口壺である。頸部から直線的に外傾する口縁部を持ち、端部は細く丸く納める。体部は中央付近で最大径を測り、底部は凹みを有する大き目の平底を呈する。外面は磨耗しているが、ハケメ後ミガキを施し、内面は指ナデを施す。

12～15は鉢である。12は有段口縁を呈する鉢である。頸部から緩やかに外反する口縁部を持ち、端部付近を若干受口気味にしながら、端部を丸く納める。球形でかつ深い体部に棒状工具で沈線を施し、底部は平底を呈する。口縁部の内外面にミガキを施し、体部内面にはヘラナデを施す。13は有段口縁を有する鉢である。頸部から直線的に外傾する口縁部を持ち、端部を細く尖り気味に納める。浅めの体部に大き目の平底を呈する。内外面共にミガキを施し、かつ赤彩を施す。14は体部中央付近に最大径を測り、小さな脚部を持つ。体部は外面にハケメを施し、内面に板ナデを施す。脚部は外面に指オサエを施し、内面にヘラナデを施す。形状などから第7図-11と同じ、片口鉢の可能性がある。15はミニチュア鉢である。内湾する口縁部を持ち、端部をやや尖り気味に納める。内面は板ナデとミガキを施す。底部は平底を呈し、外面に指オサエを施す。

16～21は甕である。16は肥厚する頸部から屈曲する口縁部を持ち、端部は受口状を呈する。外面はハケメを施し、内面は板ナデを施す。内外面共に煤が付着し黒色化している。17は小型甕である。口縁部は頸部から強めに外反し、内面を肥厚させながら、端部をやや丸く納める。体部は、中央付近で最大径を測る。外面はハケメを施し、内面は頸部に板ナデを施す。底部は尖底を呈し、内面はへう状工具痕が見られる。外面全体に薄い煤が、底部内面にコゲが付着し、胎土が赤く変色していることから、日常生活において煮沸に使用されたものと考えられる。18は頸部からやや強めに外反しながら、端部を丸く納める。体部は中央付近で最大径を測る様相を呈し、頸部内面はヘラケズリによる明瞭な稜を持つ。磨耗が著しく外面の調整は不明であるが、内面はハケメを施す。19は頸部からかなり強く外反しながら、端部を丸く納める。体部は球形状で、中央付近で最大径を測る。底部は中心からズレており、わずかに凹みを持つことで形成される。外面は丁寧なハケメを施し、内面は頸部に板ナデを、体部に弱いヘラケズリを施す。体部外面下半に煤が付着し、それに対応するように内面にコゲが付着する。20は能登形甕である。頸部から肥厚し強く外反する口縁部を持ち、端部はナデによる面を持つ。体部は球形状の様相を呈し、中央付近で最大径を測る。頸部内面はヘラケズリによる明瞭な稜を持つ。外面は丁寧なハケメを施す。口縁部内面と体部外面に煤が付着し、それに対応するように体部内面にコゲが付着する。21は頸部から直線的に外傾する口縁部を持ち、内面を肥厚させながら、端部をわずかに屈曲させつつ細く尖り気味に納める。体部は中央付近で最大径を測り、底部は丸底を呈する。外面は磨耗が見られるが、丁寧なハケメを施し、内面は指ナデと口縁部と底部付近に板ナデを施す。





## 第4章 まとめ

今回の調査成果と、過去3次合計4地区の調査結果を踏まえ、二口油免遺跡について若干の考察を交えながら述べていくこととする。

### ・第1次調査

今調査地の東側150m地点に当たる。古墳時代の遺構は、1辺19m、幅1.5m、深度0.9mを測り、北東面に基道と思しき施設を伴った周溝を持つ方墳（以下1号墳）1基が検出されており、周溝からは、白江式期から古府クルビ式期までの土器が出土している。この1号墳の南側には、南北方向に約65m、東西方向に現状で約30m、幅0.5m～0.3mを測り、平面形態が方形もしくは隅丸方形で、柵列を持つ区画溝が巡る。その区画溝の範囲内には、平地式建物1棟や独立柱建物4棟が検出されている。この区画溝からは、古府クルビ式期を中心とする土器が出土している。また、北東～南西方向に延びるSD1・3からも、同時期の土器が出土している。1号墳と居住区域は、出土遺物から判断して若干の時期差があり、1号墳築造時少し離れた場所に形成していた集落が、築造後しばらく後に1号墳の南側に集落を形成するようになったと考えられる。また、1号墳の周溝から出土した土器から、長い期間に渡り祭祀が行われていたと考えられる。

平安時代の遺構は、9世紀代のものは試掘調査の結果確認されていたが、当遺跡では初となる7世紀前半に比定される坏蓋がSD1上層から出土したのを始め、12世紀代の遺構も確認された。

### ・第2次調査

今調査地から北北西約300mの地点に当たる。弥生時代の遺構は、幅2.5m～2.0m、深度1.5mを測り、弥生時代後期の環濠の一部である可能性が非常に高いSD1001が検出されている。また、竪穴式住居1棟（SH403）、周溝を持つ建物1棟、方形周溝墓1基も検出されており、それぞれ月形式期を中心とする土器が出土している。

古代の遺構は、独立柱建物8棟が検出されている。内訳は、総柱建物2棟、側柱建物6棟である。その中に建物の壁に並行するように周囲に溝を4条配し、北東面に庇を持つ8世紀代の側柱建物1棟が検出されている。

中世以降のものでは、断面W字型で1辺10m前後の方形区画溝が検出されている。

### ・第3次調査（A）地区

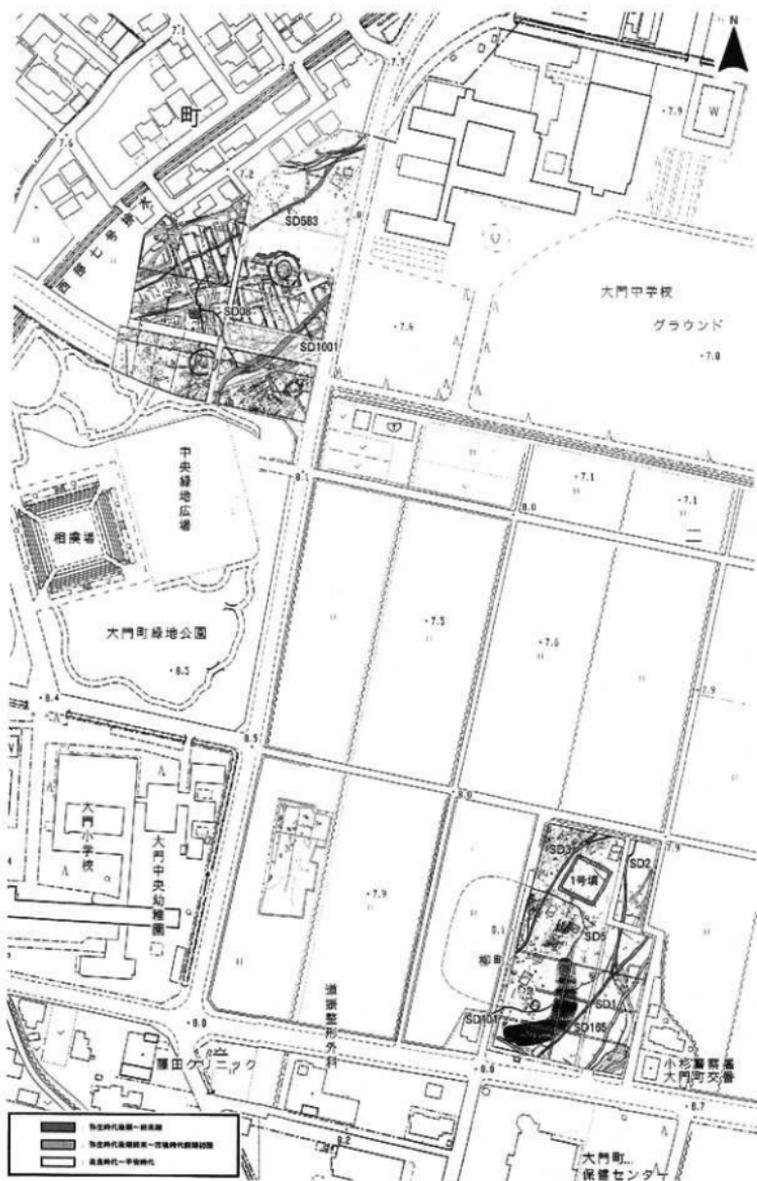
今調査地から北北西約350m～300mの地点で、第2次調査地の北側および北西側に隣接する地点に当たる。弥生時代の遺構は、第2次調査で検出したSD1001の北西側約70m付近に、並行するSD583が検出され、この2条の溝の間に周溝及び周堤を持つ平地式建物の一部と考えられる遺構が1基確認されている。また、SD583以西にはほとんど遺構が見られず、この溝が集落西側の境界になる可能性が高い。

古代の遺構は、SD1001以北は遺構の分布が円散としており、集落の拡がりの終わりを感ずる。

中世以降では、第2次調査で検出した方形区画溝の全体が明らかになり、その区画内で作物を耕作していたと考えられる。

### ・第3次調査（B）地区

今調査地から北北西約350mの地点で、A地区の北側及び東側の地点に当たる。弥生時代の遺構は、A地区から続く溝（SD583）と、また周堤及び周溝を持つ平地式建物の残りの部分が確認された。



第10図 二口油免遺跡遺構配置図 (1 : 2,500)

奈良・平安時代については、A地区で集落の拡がりの終わりを感じていたが、SD583を意識した軸を持つ掘立柱建物3棟が検出された。また、SD583の延長が掘立柱建物付近まで確認され、その周辺で並行する他の溝と同様、多量の古代遺物が出土している。

過去の調査成果を簡単にはあるがまとめてみたことで、弥生時代後期から古墳時代前期初頭にかけての集落の様相がある程度判明してきた。北東-南西方向に、70~50mの間隔を空けて並行する2条の溝が、北西側（第3次調査SD583・第2・3次調査SD1001）と南東側（第1次調査SD1・3）に伸び、その周辺で、北西側は弥生時代後期から終末期（法仏式期~月影式期）にかけての居住区域及び墓域が形成され、南東側では、弥生時代後期終末期~古墳時代前期初頭（月影式期~古府クルビ式期）にかけての居住区域と墓域が形成されていることが言える。つまり、何らかの原因で弥生時代後期から古墳時代前期初頭にかけて、北西側の集落を形成していた集団が、南東側に方墳1基を築造し、65m×65mの柵列を持つ区画溝の範囲内に新たに居住域を形成し移り住んだと考えられる。このことから、当初2条の溝は環濠もしくは集落を区画する溝と考えられたが、集落自体に時期差があることから、これら2条の溝が環状に巡る事で1つの集落を形成していたとは考え難く、生活用水を得るための流路であったのではないかと推測できる。また、南東側で形成された集落と今調査地の関係は、出土土器の時期が重なることから、同一の集落範囲に存在したものと考えられる。

以上、二口油免遺跡の集落構成について簡単に述べてみたが、各時期の詳細な集落構成については、まだまだ不明な点が多いのが現状である。特に県内において、1号墳のような大型の方墳を伴う集落は稀で、弥生時代後期から古墳時代前期初頭にかけての平地における集落構成を知る上でも、今後の調査に期待したい。

#### 引用・参考文献

- 大門町教育委員会 1981 『大門町史』  
富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会 1991 『大門企業団地内遺跡発掘調査報告(1) 一布目沢東遺跡・布目沢北遺跡一』  
富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会 1992 『大門企業団地内遺跡発掘調査報告(2) 一布目沢北遺跡第3次調査一』  
大門町教育委員会 1997 『大門東部地区埋蔵文化財発掘調査報告一県営ほ場整備事業に伴う試掘調査報告一』  
大門町教育委員会 1998 『二口油免遺跡発掘調査概要一庄川右岸改修関連住宅団地事業に係る調査一』  
大門町教育委員会 1998 『二口油免遺跡第II次発掘調査概報一土地区画整備事業に係る調査一』  
大門町教育委員会 1999 『二口油免遺跡第III次A地区発掘調査概報一二口土地区画整備事業に係る調査一』  
大門町教育委員会・(株) 中部日本鉱業研究所 1999 『二口油免遺跡第B地区発掘調査報告一二口土地区画整備事業に伴う発掘調査報告一』  
(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 1998 『五社遺跡発掘調査報告書』  
金沢市埋蔵文化財センター 1999 『戸水遺跡群I 戸水ホコダ遺跡』  
石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2002 『小松市 一針B遺跡・一針C遺跡』  
大島町教育委員会 2003 『小林遺跡 町道北高木小林線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』  
(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2004 『黒川尺目遺跡・黒川中老田遺跡発掘調査報告』  
田嶋明人 1986 『考察一津町遺跡出土土器の編年の考察』 『津町I遺跡』 石川県埋蔵文化財センター  
久々忠義 1999 『古墳出現期の土器について』 『富山平野の出現期古墳 発表要旨・資料集』 富山考古学会  
堀 大介 2003 『月影式の成立と終焉』 『古墳出現期の土器器と実年代』 (財)大阪府文化財センター  
岡本淳一郎 2003 『越中西部地域における古墳出現期の土器様相』 『庄内式土器研究XVII』 庄内式土器研究会  
安 美樹 2003 『能登形カメと千種形カメ』 『庄内式土器研究XVII』 庄内式土器研究会

# 写真図版 1



調査区全景（南西から）



調査区全景（北から）

写真図版 2



SK 03 土器出土状況 (北から)



SK 03 土器出土状況 (北から)



SK 03 土器出土状況 (北から)



SK 11 土器出土状況 (東から)



SK 11 土器出土状況 (南西から)



SK 11 土器出土状況 (西から)



SK 24 土器出土状況 (南から)



SD 02 土器出土状況 (西から)

### 写真図版 3



落込み内 土器出土状況 (北から)



落込み内 土器出土状況 (北から)



調査前風景 (南から)



調査後風景 (南東から)



作業風景



作業風景



作業風景



作業風景

写真图版 4



7-1



7-2



7-3



7-4



7-5



7-6



7-7



7-10



7-10



7-11



7-12



7-13



7-14



7-15



7-16



7-17



7-18



7-19

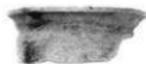
写真图版 5



8-10



8-13



8-14



8-15



8-17



8-18



8-19



8-22



8-23



8-25



8-26



8-28



8-29



9-1



9-2



9-3



9-4



9-5

写真图版 6



9-6



9-7



9-8



9-9



9-10



9-11



9-12



9-13



9-14



9-15



9-17



9-18



9-19



9-20



9-21

# 報告書抄録

ふりがな	ふたくちぬぶらめいせきはつくつちょうさほうこく ちょうりつとうごうようちえんぞうせいにともなうはつくちょうさ							
書名	二口油免遺跡発掘調査報告 - 町立統合幼稚園造成に伴う発掘調査 -							
シリーズ名	大門町埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	23							
編著者名	尾野寺克実 田中 昌樹							
編集機関	株式会社中部日本鉱業研究所 埋蔵文化財調査室							
所在地	〒933-0824 富山県高岡市西藤平蔵581番地							
所在者	大門町教育委員会							
発行年月日	2005年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〇'〇'	東緯 〇'〇'	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
二口油免	大門町二口	163821	202142	36° 43' 21"	137° 03' 29"	20041102~ 20050214	2,060㎡	町立統合幼稚園造成に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
二口油免	集落	古墳	溝・土坑 ピット	土師質土器		古墳時代初頭 (古府クルビ式)		

大門町埋蔵文化財調査報告 第23集

## 二口油免遺跡発掘調査報告(4)

- 町立統合幼稚園造成に伴う発掘調査 -

2005 (平成17) 年 3 月 発行

発行 大門町教育委員会  
 編集 大門町教育委員会  
 株式会社中部日本鉱業研究所  
 〒933-0824 富山県高岡市西藤平蔵581  
 印刷 株式会社富山フォーム印刷  
 〒939-8214 富山県富山市黒崎173番地 1



